

母の 681 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

わたしの原風景⑩／ささめやゆき 2
小松崎進さんを偲んで／広瀬恒子、とよたかずひこ 3
『てんじつきさわるえほん いないいないばあ』ができるまで 4
新刊紹介／谷本雄治、内田麟太郎 6
まるまるめいた日記⑩／種村有希子 7
イラスト／吉田尚令



いろいろな人が当たり前に出てくるお話 小手鞠るい

視覚障害のある母（現在は全盲）に育てられ、知的障害のある叔父（故人）とも幼い頃から仲良くしていた私にとって、障害のある人は決して特別な存在ではない。口が達者で人一倍チャレンジ精神旺盛な母も、口数が極端に少なく優しくてあたたかい人柄だった叔父も、どこにでもいるような「普通の人」である。障害者という呼び方にも疑問を感じる。ふたりには、障害者以外の側面も多々ある。母のことを書いても、叔父のことを書いても、障害を乗り越えて生きる「感動と勇気の物語」にはならないだろうと思う。もちろん、人には言えない苦労も多々あったことだろう。でもそういった苦労は、私にもある。誰にでもある。

日本の児童書（そのすべてを読んだわけではないので、あくまでも私が目にした本の大半ということですが）を開いてみると、いわゆる健常者だけの出てくるお話のなんと多いことか。障害のある子どもが出てくるときには必ず「障害を乗り越えて……」というテーマが提示されている。障害のある子を特別扱いにするのではなくて、もっと当たり前、何気なく、健常者と言われている子どもたちにさらりと交えている作品があってもいいのではないかと思うのは、私だけだろうか。学校でいじめが起こるのは、その他大勢の子と異なっている子を異分子として排斥しようとする大人、社会、国家が背景にあるせいではないだろうか。

「普通の子」とは実は、実際には存在しない子どもでもある。誰もに個性があり、誰もが特別なものだから。障害のある子、ない子、目の見える子、見えない子、車椅子に乗っている子、松葉杖をついている子、両親の揃っていない子、親がひとりだけの子、片方または両方の親が外国人（生まれたのは日本、あるいは外国）、両親が同性など、多様なバックグラウンドを持つ子どもたちがごく普通に、主役でもいいし、脇役でもいいから、もっとどんどん児童書に登場してもいいのではないかと私は思う。

現在のアメリカの児童書業界で、たとえば白人だけが出てくるお話を書いたら、出版されない可能性が高い。それと同じように「日本人の健常者だけが出てくるお話なんて、不自然で出版できません」と、編集者が言えるような日本社会になっただけのいいのになあ。こんな絵空事がいつか現実になっただけのいいのになあ。そんなことを願いながら、きょうも子どもたちのためのお話を書いている。

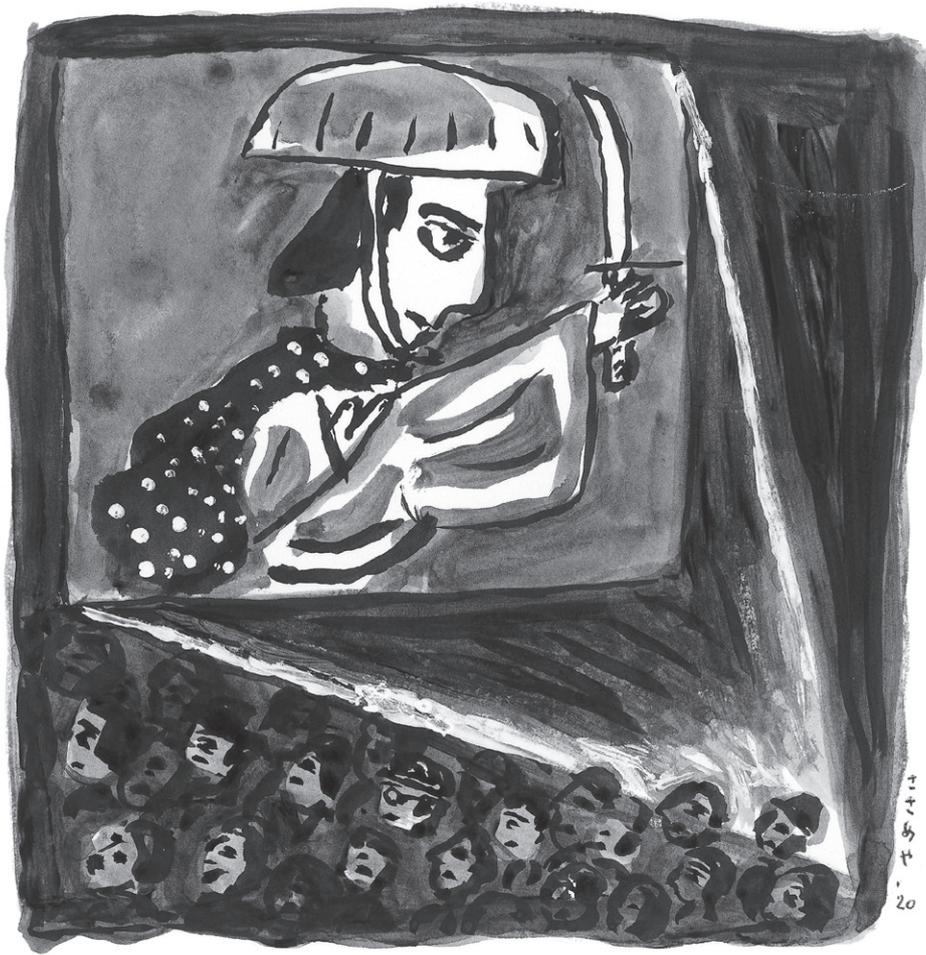
（こでまり るい／小説家）

わたしの原風景

17

さなめやゆき

絵本作家



ボクと弟は石けんと手ぬぐいを持って、一日おきに銭湯へ行った。

その風呂屋の前が映画館。最終の上映が始まると、もぎりのお姉さんはいなくなってしまうので、無料で映画が見られた。その誘惑から逃れられない兄弟だ。適当に頭からお湯をかけて映画館へ走った。

すると、おとといと同じシーンだった。股旅姿の高田浩吉がススキの穂を持って、気持ちよさそうに歌を唄って峠をこえていくのだ。

小学四年生のボクはうっとりしてやまない。だが、ふと、いまごろ、かあさんは店を閉めているだろうかと、ちよっぴり、うしろめたい気持ちかわいてくるのだった。道路まではみ出した商品をしまい、日よけのテントをまきあげて、それから雨戸を店の横から持ってきて店を閉じるのだ。まだシャッターなんて気の利いたものはなかった。風の強い晩など大変だったろうな。

それでもボクと弟は銭湯の帰りに映画館をのぞくのが癖となり、トニ二谷の『さいざんす二刀流』を見て「さいざんす」が口癖になり、金語楼の兵隊ものを見ては湯冷めしそうになり、家に戻るやいなや蒲団にもべり込むのであった。指折り数えてみれば、もう七十年近く昔のことである。

母の敷いておいてくれた蒲団はどこか湿った匂いがしていた。ボクは雨の日はその床の中に入って雨音を聞いた。そして「少年画報」を読んでいると、どこまでも自堕落になっていった。かあさんはボクたちが寝入ったあとに銭湯にゆく。いったい、いつ眠っているのか、翌朝早く「ごはんだよ」と起こしてくれる。かまどのお釜から白い湯気が溢れ、鍋にはじみ味の味噌汁、納豆には細かく刻まれたネギ。こうしたくり返しの中、ボクたちは少しずつ大きくなったのだ。

そのころかあさんはどんな気持ちでボクたちを見て、そしてさやかな自分の人生をどう思っていたのだろう。今日、ふとその頃の母が思いつかび、ボクの目は熱くなった。

去る十一月三日、小松崎進さんが永遠の旅路につかれた報に接しなんともいえない侘しさを感じています。子どもたちに本の楽しさをと長年にわたり読み語りの活動を続けてこられたその歩みに、心からありがとうございます。ごさいましたとまず申し上げたいと思います。

小松崎さんは東京で四十年近く小学校の教師の仕事をされ、その活動の中でも特に「読書教育」に力を注いでこられました。退職後、絵本や童話が好きな有志と「いつても どこでも だれでも 読み語り」を合言葉に一九八二年「この本だいきの会」を創立されます。当時子どもの本の研究、普及にかかわる全国的な会としては「日本子どもの本研究会」「親子読書地域文庫全国連絡会」などが活動していましたが、この本だいきの会の特色は、会名にもあらわされているように何よりわかりやすく、親しみやすさでした。

会の活動として「読みきかせ」ではなく「読み語り」を、とされたのは押しつけがましくないようという配慮にもとづかれたのでしょう。小松崎さんはお話しも「能弁」というより本質的な問題をわかりやすく率直に語られる方だったと思います。

毎年開かれるこの本だいきの会年の暮れ集会では参加者の人たちがそれぞれ楽しみ合っているだろうかとおちよこを片手にひとつひとつのテーブルをまわって、それとなぐ心くばりされていらした姿が思い出されます。もう一度「ありがとうございました」をお伝えしたいです。

(つねこ)／親子読書地域文庫全国連絡会代表

ありがとうございました 広瀬恒子

小松崎進さん
を偲んで

昨年十一月三日に、小松崎進さんが逝去されました。九十五歳でした。小松崎進さんは、「この本だいきの会」代表として、長年子どもの本の読書運動に携わってこられました。本誌でも、二八二号（一九八七年十月）以来、絵本の紹介を中心に、度々ご登場いただきました。ご冥福をお祈りするとともに、生前交流のあったお二人の追悼文を掲載いたします。



小松崎先生からコマ先生へ とよたかずひこ

千葉県市川市にあるホテルの宴会場であった。三百人を超すご婦人方を前に、一人の老人が壇上から語りかけていた。マイクなしでも後方まで十分届く力強い声だった。白髪をたなびかせ眼光鋭い哲学者のお姿である。

あ、オレ場違いなところに来てしまった、と思った。新興宗教の教祖さまが説法されていると見えたのだ。「この本だいきの会」などという甘いネーミングとの落差が大きい。途中入場の小生は訳のわからないまま、前方客席のまん中あたりに座らされた。汗をかいたまま、その教祖さまが何を話されていたのかはまったく覚えていない。

一九九八年十二月のことであった。拙作『でんしゃのって』という絵本が、地味ながら少しずつ売れ出したところに版元を通して出席を促された。小生が教祖さまと勘違いしたお方が、小松崎進である。小松崎さんが小学校の先生であられたことはだいぶあとになって知った。だからその後は小松崎先生と呼んでいいのである。そして、もっとあとになって「コマ先生と呼んでいいほど距離を縮めていただいた。会に参加している作家側は児童文学の方が多く、小生は酒を飲みながら、そのやり取りを聴いていることが多かった。

人は誰も死ぬ。コマ先生は、親族以外にも、教えずやこの本だいきの会のような方々と、いっぱいいっぱい幸せのときを過ごし、いっぱいいっぱい思い出を抱えて逝かれた。敬愛され続けて、よき去り方をされたと思う。

(絵本作家)

『てんじつきさわるえほん いない いない ばあ』 ができるまで



松谷みよ子／ぶん 瀬川康男／え 本体価格 3600円+税

『いない いない ばあ』の触図について

「点字つきさわる絵本」の触図は、絵本の絵と位置がずれていたり、形が異なっていたりすることがあります。これは見えない人にわかりやすいように配慮したためです。

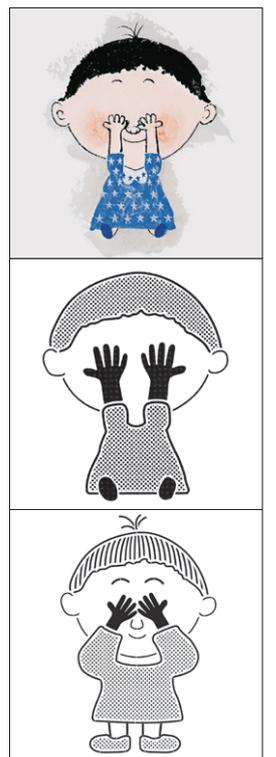
『てんじつきさわるえほん いない いない ばあ』では、どんな部分を工夫したのでしょうか。触図制作を担当された田中産業株式会社企画制作課の大山裕さんにお話を伺いました。



ねずみの絵と触図

「ねずみの絵は、他の動物と比べて小さいですね。そのまま触図にしても小さ

すぎて指先で判別しにくい
ため、サイズをひと回り大きくしました。
これによって、
ねずみの目や
鼻、手やひげなど、細かな表現ができる
ようになりました。また、のんちゃん、はもとも座っている絵で触図を作っていました
が、足の見えている部分が少なく
洋服の飾りのように感じられわかりにくい、
という盲支援学校の子どものたちの意見があり、わかりやすさを優先して、立っている姿に変更しました」



製本行程での工夫について

これまでの「点字つきさわる絵本」では、製本行程での難しさが、大きな障壁となってきました。通常、絵本と同じように製本すると、圧力によって点字がつぶれたり、対向ページをへこませたりしてしまつたのです。そのため「リング綴じ製本」や「蛇腹式製本」が採用されましたが、「コスト高やページ数・サイズに制限があることなど、大きな制約がありました。」

そんな中、通常の「合紙製本」を可能にしたのが、大村製本株式会社です。工場に足を運び、齋藤和明社長、福原繁工場長にお話を伺いました。

『「いない いない ばあ」は絵のタッチがとても印象的な作品ですので、なるべく絵の質感を触図で表現できるように制作しました。触図のドット感も元の絵の雰囲気に近いように数多くのパターンを

先月刊行した『てんじつきさわるえほん いない いない ばあ』は、点字だけではなく、絵の部分もさわられるように、盛り上げ印刷が施されている絵本です。もっと多くの子どもたちに楽しんでもらえることを願って、刊行されました。「点字つきさわる絵本」は、製作面で通常の本とは違う難しさがあります。それは、盛り上げ印刷される触図（＊）（制作と、製本行程の二点です。今回は製作に携わる、印刷会社と製本会社にお話を伺って

（＊）触図とは、カラーの絵の上に印刷されている盛り上がった印刷部分のことです。さわることのできる絵という意味で、触図と呼んでいます。点字と同様、透明樹脂インクに紫外線を当てて、瞬時に固める特殊印刷で作られています。

合紙絵本はページごとにごきつちり貼り合わせる基本なので、そもそも表面に凹凸があつてはいけないのです。また貼り合わせる際には、何十冊も積んでプレス機で圧力をかけて製本していきます。ですが、点字つきさわる絵本では、それをそのまますることができません。そもそもが矛盾した作りなんです（笑）」（齋藤社長）

では、どのように製本しているのでしょうか。

「まずページ全面に糊を付けずに、四隅のみに糊を付けて、接着しています。また製本の圧力は通常時の十分の一以下に抑えています。読む人にとっては、へこみがあることは『雑音』になってしまいますので、それを防ぐことを最優先に考えて、ライン作業で行わず、一冊ずつ手作業で行っています」（福原工場長）



1冊ずつ手作業で製本していく

「出来上がった点字つきさわる絵本を、目の不自由な方が手にとってくださるまで

も喜んでいる姿を見たことがあるんです。そのことは忘れられませんね。本当に大変な作業だけれど、あれだけ喜んでくれる人がいるということで、本当に報われました。その姿を思い出しながら、今も製本作業に臨んでいます」（齋藤社長）

「点字つきさわる絵本」について

今回は、『てんじつきさわるえほん いないいないばあ』の製作面について、ご紹介しました。これら製作に関するさまざまな情報は、出版社、印刷・製本会社、図書館司書、書店員などが集まる「点字つき絵本の出版と普及を考える会」で共有され、こうした本を増やしていく活動に役立てられています。

「点字つきさわる絵本」と聞くと、つい見えない人だけのものと考えがちですが、決してそうではありません。「さわる読む絵本」という新しいジャンルの絵本なのです。触ることによって、見るだけでは感じることができない想像が膨らむでしょうし、バリアフリー社会を考えるときつかけになるかもしれません。「さわる」ということは実に多くのことを感じさせてくれます。見えない子と見える子が、一緒に楽しむことができる豊かな可能性を秘めた絵本を、ぜひ手にとって触って読んでみてください。

★★推薦のことば★★

●岩田美津子（「てんやく絵本ふれあい文庫」代表）

『いないいないばあ』の発行部数が700万部を超えたということは、どれだけ多くの親子がこの絵本を楽しんできたことでしょうか。見えない私は絵本無しで子どもや孫と幾度となくいないいないばあ遊びをしたものです。その『いないいないばあ』に点字が付き、絵もさわられるかたちで新たに誕生したことを大変うれしく思っています。さわれる絵は、見える子どもや大人にとっても指先から伝わる感覚から更に想像力が高まり、見るだけの絵本では得られなかった感動を味わうことができます。いないいないをしている猫の手の横からはみだしているひげや、手の下から覗いている開いた口は何とも愛らしく、鼠の細い尻尾しっぽはかわいく、狐の太い尻尾は沢山の毛でびっしり覆われていそうなど、いろんなことを感じさせてくれます。のんちゃんの腕や猫や熊の掌のつるつる感はさわっていてとても気持ちいいです。

点字本は通常左開きですから、右開きで作られたこの絵本にはちょっと戸惑いを感じる方もいるかもしれませんが、これは元の絵本が右開きであり、点字つき絵本の新しい形が開けたといってもよいのではないかと私は思っています。

●石井みどり（元横浜市立盲特別支援学校図書館司書）

読むことに様々な障害がある子どもたちにも「読める／読みやすい本」を届けたいと思い、図書館司書の仕事をしてきました。子どもたちには、自分の思いを伝えたり、相手のことを受け止めるために「言葉」を大切にしたいと思っています。そんな言葉をつちかはぐんでいくためには、日常会話だけではなく、本の世界を通して獲得する二次的言葉（話し言葉+書き言葉）が必要です。たくさん本を読んで、たくさん疑似体験をして、少しでも多くの言葉に触れあって欲しい。

『てんじつきさわるえほん いないいないばあ』は、まさにそんなお子さんたちの、文字への入り口となる絵本でしょう。ぜひ周りの方々と一緒に読んで欲しいです。絵の細部を触っているうちに、指先からたくさんのお話を読み取れるようになるでしょう。「にゃあにゃのしっぽは、こんなに長いね」「きつねさんのしっぽはこんなにふっくら」「あれっ、くまちゃんには、ひげがないのね」……と。どのように工夫をしたら、読みやすい絵本になるのか。私も特別支援学校の子もたちと、試作品を確認する現場に立ち合いました。印刷や製本にも大変なご苦労があったことと思います。この本を生み出してくださり、本当にありがとうございます。

カラスのことばの通訳者

谷本雄治

カラスにふんを落とされたり、何かを盗まれたりしたら、頭にきちゃいますよね。でも気にしだしたら止まらないのが好奇心。著者の嶋田さんは追い払うのではなく、自らどんどん、カラスに近づきます。

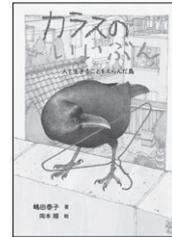
国内に何種いて、どれほど賢いのか。巣づくり、産卵、子育て、巣立ちに至るまでカラスの生活について学習し、実際の観察に生かします。その気持ち、よくわかります。嫌っていても、知れば知るほど興味がわくんですよね。さらに知りたくなるんですよね。それでとうとう、庭に来るカラスに名前まで付けてしまいます。

そうになったらもう、抜け出せません。餌付けはよくないけどお近づきにはなりたいし……なんて迷っていると、カラスはカラスで、食べたいけれどこれ以上近づくとマズいかも……と思ったのかどうか、よだれを出して、じっと我慢。そんなカラスとのユーモラスなやりとりがおもしろく、先を読まずにはいられません。

いまや害鳥の筆頭上がるカラスですが、都会のカラスは減っているのか。何が起きているのかも知らずに嫌うのはよくないし、残念でしょう。

だから、カラスのいいぶんにも耳を傾けようというわけなんですね。ことばが通じたら、お互いに誤解していることもわかってくるんだろうなあ、と思わせくれるノンフィクション作品です。

(たにもと ゆうじ/ブチ生物研究家)



カラスのいいぶん人と生きることをえらんだ鳥

嶋田泰子/著
岡本順/絵
本体価格 1200円+税

おもしろいのでっせ



ちこくのりゆう

森くま堂/作
北村裕花/絵
本体価格 1300円+税

内田麟太郎

朝、起きたら、とうちゃんとかあちゃんがカブトムシになっていた。という出だしに、私は思わずつぶやきました。「カフカの『変身』やん」。

といっても盗作だ！ などといたいものではありません。落語も漫才もたっぷり入っています。それだけのことです。でも、それだけのことが森くま堂さんとんでもない財産になっています。言葉がなんともタイショウ的（大衆のとも書く）で、おまけにその会話はテンポとユーモアにあふれ、笑わされます。物語も言葉もずしんと貯金をお持ちのようです。

さて、お話にもどれば、ぼくはとうちゃんとかあちゃんに、カブトムシ用の餌であるゼリーを与え、学校へ出かけます。ところが今度は通学路でぼくはノラのタイショウと体が入れ替わり、ネコに。このノラの絵がおおらかでたまりません。絵は北村裕花さん。このごろ流行のネコとは大違い。ずしりと存在感があります。「おれはノラである！」。

このあとはナイショです。最後の大落ちがありますからね。さて、ひと言申し上げれば、ナンセンス絵本ではありますが、やはり関西系。漫才+落語+色物たっぷりの加薬飯系ナンセンスです。

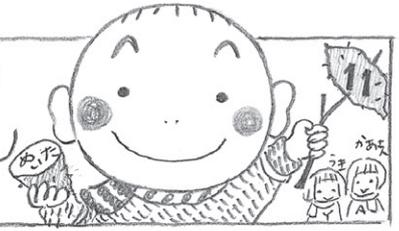
「火薬やて！」

「大爆笑したわけや」

(うちだ りんたろう/絵詞作家)

まるまるめいた日記

種村 有希子



2月の新刊図書!

[愛蔵版] 新シェーラ姫の冒険

新シェーラ姫の冒険 (上) (下)

村山早紀/著

佐竹美保/絵

本体価格 各1900円+税



多くの読者に迎えられた「愛蔵版 シェーラ姫の冒険」の続編です。2003年から2009年に発行された冒険ファンタジー「新シェーラひめのぼうけん」。大幅加筆し、装いも新たに完全版としてお届けします。シェーラザード王国の双子の王女、ルビーとサファイアは12歳。運命の扉が再び回り始め……。

猫町ふしぎ事件簿

②猫神さまは月夜におどります

廣嶋玲子/作

森野きこり/絵

本体価格 900円+税



猫の「相談役」になった遠矢は、猫と人がいっしょに幸せになるとかがやくという、虹珠をみがくことに。そして、満月の夜……。

イラスト/吉田尚令



2021年2月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第681号
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話: 03(5976)4181
03(5976)4402(編集)
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン: 谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



もとっても好きです。

(北海道 H・U 二二歳)



初めて「雨ふる本屋」シリーズを読み、とても面白かったです。表現の仕方もうすこいと思えました。「空気のく

本体価格 1400円+税

吉田尚令/絵

日向理恵子/作

単行本図書
雨ふる本屋と雨かんむりの花

単行本図書

読者の声

んは全部お見通しだったのですね!

(鹿児島県 A・K 二四歳)



タイトルが良い、とまず思いました。「お母さんの取扱説明書ってどういうことだろう?」と惹きつけられます。お母さんに怒ら

本体価格 1200円+税

佐藤真紀子/絵

いとうみく/作

単行本図書
かあちゃん取扱説明書

単行本図書

あとがき

●動物を見ていると飽きません。ここ文京区にも鳥がいるので、オオタカや日本最小の猛禽類ツミを見ることがあります。でも1番の主役はカラスです。人家の雨樋や電柱の穴ぼこに貯食していたり、大風に乗ってサーフィンしていたり(?)……行動すべてに意思を感じ人間くさく思え見飽きません。皆さんも『カラスのいいぶん』に耳を傾けてみませんか。◎

●全首の子どもたちに『いないいないばあ』の触図に触ってもらった際、ある子が登場する動物の尻尾の太さの違いに気がきました。尻尾という概念こそ知っていた彼女ですが、動物ごとに違う特徴があるというのは、新しい発見だったようです。目で見ていただけでは素通りしてしまっていたことに気がついて、それは私にとっても新たな発見でした。◎